

---

# 電気女とアンドロイド

染井 耀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

電気女とアンドロイド

### 【Nコード】

N4691I

### 【作者名】

染井 耀

### 【あらすじ】

わたしは、普通じゃない。どれぐらいかって？ まあ、普通にあなたの隣にいたら、あんたがドンびくレベルで。そうそう、これは、わたしとレイナの出会いのお話です。

## プロローグ

普通に生きたいなあっていつも思う。

周りの人から見れば普通なんだと思うんだけどね。よく普通だねって言われるし……。

でも、普通じゃない。

だって

私は

電気女、だからだ。

信じてないでしょ。当たり前だよな。

普通になりたいとか、たぶん無理。

正直、信じてくれる人なんかいないと思われる。親にしか言っけないし、親も信じてくれなかったし。

電気ビリビリしてんの見せれば信じてくれるかもしれないけど、きつといじめられるか、こわがられる。日本人ってそうでしょ？みんなが同じで安心する。

いつそ、宇宙人とかに生まれれば良かった。そしたら、宇宙人さんが助けてくれるかもね。

助けて欲しい。

誰か、誰でもいい。この苦しみから、解放して欲しい。覚めて欲しい。

この悪夢が早く覚めることを祈ってる。そんなこと無いけど。

本当、これが夢ならいいなって思う。四年生のあの日に見てる、とてもリアルな夢。覚めたらあの日だったりしてね。

本当にそうならいいのに。

## 第1話

学校の帰り道。

私は一緒に帰れるほど家が近い人がいない。

というのは、うそ。

本当は友達がいらない、ただそれだけ。独りである。

それも慣れた。

こんなのになってから、もうすぐ8年だし。

あれから、友達を作らないように、人を寄せ付けないように生きて来たから……。

もうすっかり日も落ちて、辺りは真っ黒。近道から行こう。と、決心。

まあ、あそこは危ないから、女の子が一人で、しかも夜に出歩くのは止めると親によく言われる。でも使う。反抗期なのですよ、今。てくてくと歩く。とても静かで、自分の足音がよく聞こえる。

いつもは。

でも、今日はずいぶんとにぎやかだ。

かわいいツインテールの女の子（同年代）一人と、がらの悪そうな黒スーツ、サングラス男が二人。

「なにやってんの？」

つて三人に訊いたら、

「助けてくださいっ」

つて女の子に言われた。

言われると思った。

おもむろに女の子と男の間に入る。もちろん、女の子をかばう形で。

一応こいつらの言い分を聞いてやろう。

「なにやってんの？」

まあ、まったく同じセリフなんだけども。

「そいつは研究所から抜け出した、アンドロイド電食試作機07号。私達はその研究所の職員だ」

「電食？何それ」

我ながら普通の感想である。

「……アンドロイド電食は電気を喰らう」

「電気を食べるって、普通じゃないの？」

普通の電化製品でもクーラーとか相当電気をくうし……。

「……規模が違う。そいつはそれでテロができるほど食べることが可能。」

「可能ってことは、普段はあんまり電気をくわないってこと？」

「……そうだ」

ああ、なんて素敵なんでしょう。この娘に私の電気を全部食べて貰えば、普通になれるかもしれない。

自然に口元が緩むのがわかる。

助けよう。

そう思った。

## 第2話

私がどうしてこんな危ない道を一人で歩けるのか、教えてあげよう。カバンを女の子の方に投げる。そして両手の平に集中する。

「おいっ、なにやってんだ。お前、どこにスタンガンなんか……」  
あわてる男二人。

「ハズレ」

口の形だけでそう言う。

右足に力を込めて、飛び出す。向こうはびびって左右に避ける。が、少し動きの鈍い左の男に向き直り……。

バアチイツ

と、まあとりあえず、一人は気絶させた。

多分、死んではない、と思う。加減はしたけど、最近はあまり使っていないでね。

くるり、ともう一人に体を向ける。でもそいつは、走って行ってしまった。仲間を置いて。ひどいな、あれ。本当に人の子かよ。

走る男の後ろ姿を見送ってから、女の子の方に向き直る。彼女はわたしが投げたカバンを、大事そうに持っていた。

それにしても、きれいな髪だなあ。わたしは静電気がすごいので、髪をあまり伸ばせないから、ちょっとうらやましい。今も、やっとボブカット、ぐらいしかない。だから、ちょっとだけ、ね。

「あの、ありがとうございます。えと……その」  
ずいぶん人間くさいアンドロイド（？）だな。

「アンドロイド電食試作機……07号、だっけ？」  
そして名前、長いな。

「レイナって呼ばれてます。……研究所の外では」

「レイナ？ ああ、07だから、零七でレイナってことか」  
ずいぶんと洒落た名前だこと。

「あの、あなたは？」

「わたし？ わたしは、那由多暦で、名前だよ」  
自己紹介、忘れてた。

「どうして、レイナのこと……助けてくれたんです、か？」  
レイナが上目遣いで訊いてくる。

それは、もちろん。

「わたしの電気を食べてもらうためだよ」

「!？」

びっくりしてるよ。アンドロイドなのに。

「たいへん申し訳ないのですが、あのですね。レイナは、あなたの電気を食べてさしあげることがは出来ないのです」

ちよつと、何言ってるの？

「どうして？」

一息おいて、レイナは話す。

「電気って、さっき両手から出していたアレ、ですよね？」

わたしは、コクンとうなずく。

「アレはおそらく、あなたの体内で作られている電気だと思うんです。なので、電気を発生させなくする、ということは、出来ないのです」

はい？

「電気の発生を止める方法は、レイナの内部コンピューターを使い、検索してみところ……」

ところ？

「生命活動を止める。要するに、死ぬ。死ねば発生しなくなるそうです」

「んなっ」

なんて、理不尽なんだ。わたしはずっと普通になる方法を探し続けてたのに、目の前ロボットが、それをあっさり見つけてしまった。

普通になれる方法があると、それを支えにして生きてきたのに……。

わたしはこれから何を支えにして生きて行けばいい？

目に涙がにじむのがわかる。

レイナからカバンをつかみとって、家に向かって歩きだす。

「あいつ」

後ろから声がかかるが、聞こえないふり。というか、足が止まってくれない。

もうこれで、彼女とは関わりたくない。心からそう思った。



## 第2話（後書き）

この話で、一応完結にしますが、まだ続きを書くつもりはあるので、気が向いたら書こうと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4691i/>

---

電気女とアンドロイド

2011年1月27日12時26分発行